

装姫 変幻

シヤイロミミラブリージュ

結晶のバイオレンス編

外伝

でいふいと

挿絵 / 高浜太郎

Target

試し読み版

18
未満



登場人物紹介

Characters



とうどういん さき 東堂院紗姫

東堂院財閥の令嬢。怪人に襲われた時、聖なる光に包み込まれて変幻装姫シャインミラーージュへと変身できるようになった。



シャインミラーージュ

異世界からの侵略者である悪の組織ダーククライムと戦う変身ヒロイン。

グラッド

ダーククライムの凶悪怪人。圧倒的な戦闘力をもつ。



はかせ 博士

ダーククライムの頭脳担当。怪人や戦闘員を作り出している。



ドルコス

ダーククライムの幹部。もの凄い筋力を誇るパワータイプ。



デブロ

幹部の一人。豚型の人獣。



ミスティ

幹部の一人。ゴスロリ姿の少女。



せんとういん 戦闘員

普段はシャインミラーージュに一方的にやられてしまう戦闘員であるが……。



第一話	刻まれる絶望。地に伏せる変幻装姫	006
第二話	被虐の連鎖。屈辱のスレイヴフォーム	058
第三話	ふたなり装姫。汚辱の産卵アクメ	112
第四話	シヨ一の終わり。被虐のサンドバッグ	165
第五話	陰りゆく希望の光。ゴミと化す正義の使者	219
最終話	闇に消える正義の光。変幻装姫の終わり	273
書き下ろし	殴り潰される正義。敗北ヒロイン白濁排泄アクメ	324

（しかし……なんて闇のエナジীর強さですの……ミステイやドルコス達とは比べ物になりませんわ）

遠くから感じ取っていた時よりも数段巨大に思える闇のエナジীর。ビリビリと肌を刺すような凶悪な悪の力に、自然と頬を汗が伝う。

神聖なエナジীর力を信じてはいる。しかし、この男の持つ力の大きさにさしものシャインミラージュも緊張を隠しきれない。

「てめエがシャインミラージュか。へエ……おおお、しつかりと神聖なエナジীরを感じる。昂たかぶってくるぜエ」

そんな変幻装姫と対照的に、グラッドは仮面の下の瞳で、ジロジロと品定めをするようにしてシャインミラージュの肢体を眺めていた。

「何を勝手にペラペラと……あなたがダーククライムの一員である以上はわたくしの敵ですわ。このシャインミラージュが裁いてさし上げます!!」

「ダーククライムの一員ってわけじゃねエが、まあいい。てめエみてエな生意気そうなやつは徹底的にボコるに限る……それが神聖なエナジীরを持つてンなら尚更だしよオ。ヒヤヒヒッ!!」

不自然な笑いが足されたとしても、相手がダーククライムの怪人であるならばおかしい

ことではない。

改造されているモノ達。悪に身を墮とした存在なのだから、異常をきたしている方が逆に自然なのだ。

そしてこの男もまた同じ。相手を力で叩きのめすことに悦びでも覚えるのだろう。放っておけばどれだけの被害が出るか……逃すわけにはいかない。

「残念ですが、あなたはわたくしに勝つことはできませんわ。正義のヒロインである変幻装姫シャインミラージュが、悪に敗北するなどあつてはならないのですから」

正義は常に勝利するモノ。平和を害する悪党に敗北するなど、あつてはならない。それはシャインミラージュが信じる正義の姿であり、今までも覆ることはなかった。

「あア？ なら今日がシャインミラージュの敗北記念日つてことになるなア。おめでどうおめでどう……ヒヒヤヒヒッ!!」

凜とした言葉に対して嘲笑うようにして返すグラッド。

ドルコスのような単純な頭からくるモノではない、完全なる勝利を確信しているからこそ余裕。

今も肌で感じる闇のエネルギーの巨大さから、変幻装姫自身も侮ることはできない強敵であるとして理解している。

「そんなことを言っていていられるのも今のうちですわッ!! これでも喰らいなさいッ!! フレア・バレット!!」

会話をしている間に人々の避難はある程度は完了したようだ。

だがもう少し、この場に釘づけにする意味も込めて、シャインミラージュは桃色のマジカルフォームへと変化する。

ストライカーフォームでの攻撃。しかも不意打ちを軽くかわすほどの速度と反射神経を持つ相手へと、バスケットボール大の火球を連続で飛ばす。

たとえかわされても被害が出ないように方向も調整はしているが、相手がどう出るかを確認して次の攻撃へと移行できるようにしかとバイザーの下の双眸そうぼうを細める変幻装姫。

「ハッ!! そんなモンでオレを倒そうってのかァ!!」

次々に放たれる燃え盛る赤い弾丸。それを前にしてグラッドはただ片手を突き出すだけ。「なっ——!!」

直後の光景に変幻令嬢は目を見開いての驚愕きょうがくを隠せなかった。

接近する炎弾が男の手に触れただけで消えていく。まるで元々存在していなかったかのようにに簡単に。

神聖なエナジーにより作り出された攻撃だというのに、意に介していないという様子で

かき消していく様はやはり今までの怪人達とは次元が違う。

「ほらよ、返すぜ」

最後の一発だけは消されることはなかったが、代わりに指によって弾かれた。

それは倍以上のスピードをもって、攻撃を生み出した本人である変幻令嬢へと狙い定め
ている。

「くううッ!!」

咄嗟のところまで再び炎弾を生み出して相殺することに成功はしたが、衝撃でシャインミ
ラージュの身体が押されて数歩後ずさった。

「攻撃してきた奴が下がっちゃ世話ねエな。シャインミラージュ様の力はこんなモンか？
こんなんじや正義は負けちまうなア。ヒヒヤヒヤヒヤッ!!」

この一度の攻防だけで、仮面の男の実力がハッキリと理解できてしまう。

今まで無敵の力を誇っていた変幻装姫を上回る力を、仮面の男は持っているのでは。そ
う、隠れながらも見守る人々に思わせるに十分な時間だった。

「ふざけないで。この程度でわたくしを倒せるなどと思わないで欲しいですわね。あなた
のその余裕、すぐになくしてさし上げますわ」

目の前の黒い男の強さは十分にわかった。だが凶悪な力を持っているとしても、それが

イコールで正義の敗北に繋がるわけではない。

マジカルフォームのステッキを構え、バイザーの下の視線を鋭くして睨みつける。

「力の差は歴然だったのによ。いいぜエ……もう少し遊んでやる。ほら撃つてこいよ。必殺の一撃つてヤツをよォ」

クイクイツと、人差し指を曲げて挑発するグラッド。

どんな攻撃でも倒すことはできないという自信の表れを前にして、シャインミラージュのギュツとステッキを持つ手の力が増した。

「今の言葉、後悔しないことですわね!!」

今までの相手ならともかく、目の前の相手には隙を作らなければ通用しないであろう大技。

けれども受けるというのであれば遠慮なくお見舞いしてやろう。もしこれが通じなかつたらという弱い考えが脳裏をよぎるが、それを振り払い意識を集中した。

「消え去りなさいッ!! サンダー・スピアッ!!」

バチバチとステッキの先端で暴れ回る雷に変化するエナジーの奔流。ほんりゅう

こればかりは横に撃つわけにはいかずに、シャインミラージュは高く飛ぶと、一步も動く気配のない仮面の男へと狙いを定めてステッキの先端を向ける。

直後に放たれたのは巨大な雷。過去の怪人達に放ってきた威力を上回る、多量に込められた神聖なエナジーによる必殺の雷撃が、まっすぐにグラッドへと落ちた。

地面への直撃で弾けるようにして周囲を照らす眩い閃光。誰しもが目を閉じ、逸らし、受けた黒い男の状態を確認することができない状況下。

「これだけの一撃なら……!!」

今も感じ取れる強烈な闇のエナジー。それはまだ仮面の男が完全に倒されていないことを意味している。

けれども、大きな傷を与えることができていたのであれば十分。サンダースピアによる雷撃が終わるのに合わせて途絶えぬ攻撃を繰り返して、反撃の隙も許さずに決着をつける。落下を始める身体。フォームチェンジをして一気に勝負をつけようと攻撃を止めようかとした最中、急激に膨れ上がる闇のエナジーの接近を変幻ヒロインは感じ取った。

「そんなのじゃ効かねエなア!!」

「ま、まさかっ——おぶううううッ!!」

雷の中を真正面から突っ切ってきた仮面の男の姿に、咄嗟にステッキを構えて防御しようとするが、振るわれた拳によって容易く真っ二つに折られてしまう。

そのまま無防備な腹部へと深々と突き刺さるグラッドの握り締めた拳。潰れた声を唾液

と共に漏らしながら、シャインミラージュの身体がくの字に自然と折れ曲がった。

今までの戦闘で経験したことの無い攻撃の直撃。それだけではない。その一発がまるで必殺の一撃のように重く、体内が押し潰されてしまうのではという錯覚にすら陥る。

「すごおい、あの攻撃を無傷で抜けちゃったわぁ。それにあんなにお腹にめり込んだじゃつて……うふふ、痛そうねえ」

その光景はグラッドの視界と直結している生の映像として、ダーククライムの基地内に流れていた。

サンダースピアをものともしないグラッドの耐久力。そして、憎きシャインミラージュの腹部に突き刺さる一撃に、ミステイは昂りを隠しきれない。

「見世物としても十分じゃのう。これなら期待できそうじゃわい」

それはデブロも同様であり、デップリとした顎あごを撫でながらこれから始まるであろう変幻装姫の姿を思い浮かべて笑う。

「オイオイオイ。神聖なエナジーを持ってんのに今ので全力なのかア!？」

「きゃあぁッ!! ああぐ!! げふっ……ごほっ、あ、かはっ……」

桃色のポニーテールを掴まれ、期待外れだとばかりに顔を近くして煽られる変幻装姫が、地面へと投げ捨てられた。

受け身を取る余裕もなく、背中から落ちて一度軽く跳ねる豊満な身体。

着地する仮面の男と、仰向けに倒れて苦しむ正義のヒロインの姿は、人々に大きな絶望を刻みつけるに十分な光景だった。

「コレじゃ弱い者イジメになっちまうなア。だがオレも鬼じゃねエ。ここから狙うのは正義のヒロイン様の腹だけにしてやるよ。それも両手だけでなア」

見せつけるようにして高らかに上げる腕。両の腕のみを使用して、シャインミラージュの腹部だけを殴りつけるという宣言。

それは明らかに変幻令嬢を馬鹿にし、自分が負ける可能性などないという絶対的な自信からくるモノ。

「……くう……はあ……どこまでも、馬鹿にして……あなたのような相手に、わたくしは絶対に負けませんわッ!!」

ズキズキとした鈍痛が今も続く。ドルコスのような巨腕ではないけれども、闇のエナジの込められた一撃の破壊力は絶大だった。

本来ならば無効化できるはずなのに、仮面の男の持つ闇のエナジーはその強大さ故か不可能。

痛みの残る腹部を片手で押さえながら立ち上がるシャインミラージュは、己が一番得意

とするストライカーフォームへとフォームチェンジする。

「負けねエとか言うのは簡単なんだよ。ほれ、さっさと証明してみせてくれや」

（使うのは両腕。それも狙うのはわたくしのお腹だけ……おそらくは嘘ではありませんわ。でしたらそこに注意して……!!）

嘲笑われ、馬鹿にされている現実プライド高い変幻令嬢にとつては大きな屈辱。

しかし、この相手に怒りに任せて戦っても待ち受けるのは完全なる敗北だけ。ならばと、再び相手に甘えることになってしまふけれど、勝利の為に利用させてもらうしかない。

人々の希望である正義のヒロインが、悪に負けるなどあつてはならないのだから。

「いきますわ!! はあぁッ!! やあぁぁッ!!」

サンダースピアによって服だけがボロボロになっている黒の男へと接近し突きを放ち、横にかわした方向へと追うようにして一閃する。

相手の動きを、両手の様子を確認しながら逃がすまいとして数度レイピアを振るい、意表を突く意味も込めて変幻装姫は足払いを仕掛けた。

「そらそらどうしたァ!! 全然オレに当たってねエゼエ!! 変幻装姫様の力はこんなモンかアッ……ヒヤヒビヒッ!!」

「こんなモノのわけがないでしょうッ!! すぐに届かせて——」

跳躍してかわす仮面の男。空中であるならば通常ならば身動きはできない。

闇のエナジーを持つ相手なのだから何か方法を持っているかもしれないが、それでもチャンスであることに変わりはないのだ。

ストライカーフォームによる速度を強化された状態。この近距離ならば外さないと、しかとグラッドを見据えてシャインミラージュは突きを放った。

「届かねエなアツ!!」

「なッ——えぶううううッ!!」

しかし、突き出した手は仮面の男によつてあっさりと掴まれ、カウンターとしてもう片方の手が柔らかな腹部へとめり込んだ。

腹部に生じる強烈なボディブローの激痛に唾液が飛び散り、変幻ヒロインの目の前が一瞬真っ白に染まる。

「スピードが自慢じゃなかったのか？ 遅すぎてアクビが出ちまうな。オラ、正義のヒロイン様なら頑張れよ。神聖なエナジーが泣いてるぜェ!!」

ドンつと肩を押されて強引に距離を取らされる。

ヨロヨロと震える脚でなんとか倒れるのを拒否しながら、シャインミラージュはレイピアを構えた。



「げはっ……ああ、んぶっ……と、当然、ですわ……わたくしはまだ、戦えますもの……
んぐっ……!!」

(い、今のを簡単に……しつかりと見ていたはずなのに……見えなくて、反応もできませんでしたわ……そんな、そんなこと……!!)

表面上では戦う意志を示すものの、心の中では大きな困惑が渦巻いていた。

相手の手の動きも確認していたはずなのに、気づけば刺突は止められ、そのまま反撃を受けてしまったのだから当然。

攻撃も通じず、自慢のスピードでも敵わないとなれば勝利は絶望的に思える。しかし、だからといって諦めることはない。相手が強いとしても、どこかで勝機を見出さなければ。

「立ったままじゃ勝てねエぞ。ヒヒヤヒヤアツ!!」

「こ、このおツ!! んぐつぶええええツ!!」

瞬きをする間に至近距離に現れたグラッドに慌ててレイピアを振るうも、次の瞬間には三度目のボディブローが突き刺さっていた。

無様に折れ曲がる身体。ひび割れた声。ビチャビチャと地面を逆流する胃液が汚し、ビクビクと痙攣する身体の反応をグラッドの手に教えてしまう。

「イイ感触だア。クソみてエなエナジーを持った奴をこうして殴るのは最高だなア!!」

「ああつ……げふつ……ま、まだ、わたくしは……げぶううッ!!」

そのまま殴り飛ばされたシャインミラージュは壁に背を叩きつけられ、座り込むようにズルズルと身を滑らせる。

戦う意志はあるけれど、身体のダメージの大きさに自然と両手が腹部を守るように押さええてしまい、戦闘態勢を取れない。

しかし、仮面の男はお構いなしに近づき、押さえていた両手が弾かれると、そのまま凶悪な闇のエナジーによる一撃が白いコスチュームに守られた腹を襲った。

「堪らねエな。こうして^{なぶ}蹴るのは最高の感覚だ。ヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!」
ズドオツ!! ドズウウツ!! ズウウンツ!!

「おおつごおお!! ああつぶううう!! あがああ、おおつぽおお!!」

段々と昂りを見せるグラッドが、壁に押しつけられたシャインミラージュの腹部を何度も殴りつける。

壁が壊れんばかりの重い音を響かせる一撃が、何度も何度も変幻ヒロインに叩き込まれ、その度に潰れた悲鳴が響き渡った。

「あらあらあ、徹底的ねえ。でもあのシャインミラージュが何もできないでポコポコにされてるだなんて、最高の姿だわあ」

今までの溜飲が下がる光景の連続に、ミステイが赤い目を輝かせて口元を上げる。

正義のヒロインとして邪魔でしかなかった存在が、一方的に叩きのめされているのだから当然の反応だろう。

それは彼女以外にも、基地内でこの映像を見ている者全員の共通の喜びでもあった。

「かはっ……うえええ……あ、うう……は、あああッ!!」

懸命に力を込め、まだ握り締めるレイピアで仮面の男を突き刺そうとするシャインミラージュ。

「おっと、流星は正義のヒロイン様だ。まだまだ戦う気力は十分ってことか。いいねエ……そうやって反抗されるとこっちも昂っちゃまうなア」

けれども苦し紛れの攻撃が通用するはずもなく、グラッドは手を放すとわざとらしく距離を置いた。

「んぶっ……おええええ……ああ、ふうふう……く、うう……」

ズルズルと地面へと座り込むシャインミラージュが、胃液を吐き散らす。

人々に見られていることを理解しているけれども、とても耐えられるものではなかった。

「オラ立てや。神聖なエナジーに選ばれたんだろウ？ なら戦わねエとな。オレを倒さねエと、なア!!」

「ば、罰ゲーム、ですって……」

しかし、変幻装姫に後悔などする暇は与えられなかった。

次の対戦相手ではなく、罰ゲームとは……既にこの催し自体がある種の罰ゲームでしかないのだが、それを言葉にしたところで意味はない。

「そうよお。負け続けるヒロインには少しお仕置きしないとねえ。さあ、入ってきなさい」

ミステイの合図によって再び扉が開き、入ってきたのは二体の怪物。

四足歩行をする中型犬程度の体躯。体毛はなく二本の角の存在が通常の生物との違いを明確にしている。

「こ、こいつらで、何をしようというんですの……」

今度の狙いはなんなのか。今までのように暴力を受けるといのであれば、罰ゲームと称する意味はないように思える。

だからこそ予想がつかずに不安を隠しきれない声色で、ゴスロリ少女へと変幻装姫は問うた。

「うふふ、不安そうねえ。でも安心して、何をするかは今教えてあげるわあ」

シャインミラージュの不安は簡単にミステイに見透かさされ、悪意ある微笑みを黒衣の少

女は浮かべた。

「負け犬ヒロインのシャインミラージュは、今からこの怪物に犯されて貰いまあす」

「お、おか……犯される、ですつて……わたくしが、あの怪物に……!? そ、そんなの許しませんわ……!!」

一瞬、ミステイの言葉を信じられずに声が詰まる。あの怪物に犯される……そんなこと、あつてはならない現実。

「許すも許さないもないわよお。これは決定事項なんだし、今のあなたじゃ満足に抵抗もできないでしょお? あ、安心してね。犯すのはお尻の穴にしてあげるからあ」

「そ、そういうことを言っているわけではありませんわ!! わたくしは絶対に……きゃッ!? は、放しなさい……んんうッ!!」

「いいから負け犬らしい格好になるんだよ!!」

言葉の最中に戦闘員の手によつて身体を抱え上げられたかと思えば、強制的に地に両手と両膝をつかされてしまう。

その際にも今もビンビンに勃起する敏感肉棒が震え、空気摩擦だけで甘い声が漏れた。

「へへへ、デカケツ突き出したいいい格好じゃねえか。このケツ穴にさっさとぶち込んでもらいやがれよ」

「ああッ……コスチュームをお……だ、誰が、お尻の穴を犯されるだなんて……ひいッ!!」

コスチュームの布地がずらされ、シャインミラージュの尻穴が初めて空気に触れる。

乳房、改造肉棒に続き、今度はアナルをも周囲に晒してしまっている状況に、更なる羞恥が変幻ヒロインの頬を赤く染めた。

すぐにでもコスチュームを元に戻さなければと手を動かそうとした矢先に、熱く生々しい感触が窄まりへと押しつけられ、反射的に悲鳴を上げてしまう。

「ああ、この子達もシャインミラージュのアナルを犯したくて仕方ないみたいねえ」

「そ、そんなこと……や、やめさせなさいミスティッ……!! お尻の穴なんて、汚い場所ですから……だ、ダメえええッ!!」

ビクビクと生き物を思わせる脈動が小さな穴から伝わってくる。

怪物の怒張によって今すぐにでも犯されてしまうという確信。ハアハアという息づかいが耳に強く残り、変幻ヒロインは怪物の欲望を全身で感じて叫んだ。

ズブズブウウッ!!

「ひゃぐううううううッ!!」

そんな変幻令嬢の叫びなど聞こえていないと、自らの欲望に任せて一気に怪物の剛直が

シャインミラージュの尻穴を押し抜げてきた。

人と同様の形状をした怪物のペニスが一気に奥まで突き刺さり、パンつと腰が叩きつけられる。

「はあつぐ!! ぬ、抜いて……抜き、なさいい……んぐああ……こんな、お尻が抜がつてえ……んひいあああッ!!」

尻穴が拡張され、直腸が肉棒の形にされているおぞましい感覚にガクガクと四肢を震わせて歯を食い縛る変幻装姫。

抜いて欲しいという願いは一瞬だけ叶えられ、ズリユリユつと腰が引かれたことで突き入れられた肉棒が腸壁を擦りながら消えていく。

それはさながら排泄の感覚を一回り強くしたようで、ある種の恍惚こうこつすら変幻ヒロインは覚え込まされた。

パンパンパンパンツ!!

「ひいつぐ!! んぎいああ!! はあぐう!! お、お尻、壊れるうう!! か、怪物のおちんちんで、お尻の穴、滅茶苦茶になってしまいますのおお!! んひいああ!! ひやぐうああ!!」

ギリギリまで引き抜かれていたかと思えば再び腰を突き入れられ、怪物の運動能力によ

る激しいピストンが開始した。

腰を打ちつける乾いた音と共に変幻ヒロインの豊満な尻肉が波打ち、排泄の為だけの穴が押し拡げられ、滅茶苦茶に掻き回される。

慣らされてもいない尻穴が滅茶苦茶に犯される痛みを訴え、もう戻らなくなるのではという不安を覚える変幻装姫。

「怪物にケツを犯される正義のヒロインとは最高だな!!」

「いい格好ですな。シャインミラージュのようなヒロインにはああいう格好がお似合いだ」
そんな悲鳴を心地よい音楽のように聴いて満足する観客達。どこまでも穢され続ける正義のヒロインを心配する声はどこにも存在しない。

「んぐううう!! んうっひ!! お、お尻、ダメええッ!! はあっぐう!! そ、んな……
乱暴にしてはああ……んぎいああ!! くひいひいッ!!」

四つん這いのドギースタイルのまま、たふんたふんと乳房を弾ませて乱暴な尻穴汚辱に堪らずにシャインミラージュは悲鳴を響かせ続ける。

しかし、激しいピストンによって強引に動かされる身体は、同時に敏感すぎる肉棒をも揺らす結果となっていた。

ミステイの手によって感度を引き上げられた状態ではそれだけで甘すぎる痺れが加わり、

途切れない快感が変幻装姫を蝕む。

「ほうら、もう一体はこつちが狙いよお」

ズリュ、ジユズリュリュ!!

「んひいひいひいッ!? お、おちんちんに、ざらざらしたのがああ……んぐうああッ!!
ひいつああ!! くふう、んぐうつうう!!」

尻穴を犯すのとは別の一体が、四つん這いの変幻令嬢の下から潜り込み、肉棒へと長い舌を這わせてきた。

先端が二つにわかれた特殊な舌は表面がザラついており、過敏な肉肌にとっては凶器とも思える刺激を送り込む。

アナルを穿^{うが}たれ、敏感すぎる雌竿を巻きつく形で舐め搾られ、二つの激感に脳内をも滅茶苦茶にされていくシャインミラージュ。

「や、やめえっ……お、お尻も、おちんちんもお……おかしくされてええ……んおおお!!
ふぐううう!! ひやあつああ!! だめえ……だめええええッ!!」

ザラついた舌に肉棒が搦め捕られ、ギユルギユルと締めつけられる圧迫感に射精を促さ
れているのを感じる。

僅かな摩擦すら雌竿が切れてしまうのではという感覚。しかしそれはただの錯覚であり、

現実には濃密な悦感として全身を支配していた。

尻穴を肉棒をハメる為の穴に変えられているのに、肉竿の快感が痛みと打ち消し合って、まるでアナルを襲われる被虐の悦びを覚えているよう。

ドジュツ!! ズドオオ!! パンパンツ!!

「あ、あ、あああッ!! ま、まだ、激しくうう!! ひやぐうう!! ほ、本当に、お尻の穴、戻らなくなってしまうのお……!! んひっいいい!! んおお、ふぐうう!!」
まるで雌竿を責める一体に負けまいと、加速する排泄穴を犯す怪物。

今までですら凶悪なまでの激感を受けていたというのに、尻穴が捲れて戻らなくなるのではと思えてしまう。

だがそんなことは怪物には関係ない。ただただ極上のヒロインアナルを犯すべく、執拗なまでのピストンをし続けるだけだ。

抜いて欲しいのに、段々と締めつける力が強まる排泄穴。それは本能が少しずつ被虐の悦楽を欲している証でもあり、怪物はそれに負けまいと腰の律動の力強さを増していく。

「くほおおおおお!! お、おちんちんっ……ぎゅうっつて締めてはああ……んひっいいい!! つ、強く擦られて、びくびくしてえ……!! ひゃあつぐ!! んあつあああ!!」

更にもう一体も影響を受けてか舌の動きも荒々しく、締めつける力を強めだした。

尻穴と違い悦感の方が優先される雌竿は、小さな痛みと大きな快感を生み出す。

二体がそれぞれ標的である雌ヒロインの弱点を襲い、一切隠すことなく反応を見せてしまおう四つん這いで犯される無様なヒロイン。

「楽しそうでいいわねえ。でもこれじゃあ罰ゲームにならないかしらあ？」

排泄の為の穴を犯され、本来であれば存在しない改造肉棒を責められて悲鳴を響かせる敗北ヒロインを嘲笑うゴスロリ幹部。

だが、当然怪物は怒張を突き入れて終わりというわけではない。「犯す」というのだから、最後までいくのは自然の流れ。

「ひいひいッ!? な、なかで、おちんちん膨らんでえええッ!? あ、熱いのが、びくびくしてますのおおッ!! んぐうう!! ま、まさかあ……ああつひ、くひいひいッ!!」

腸壁を乱暴に擦り上げる怪物ペニスが、更に一回り大きさを増した。

今まで以上に内部での脈動を強く感じると同時に、叩きつけられる刺激が肥大化する。それは間違いない、先の自分自身が強制させられた射精が近いのだと、変幻装姫の本能が理解していた。

「あら、もう出しちゃうみたいねえ。さあ遠慮なくその負け犬ヒロインのお尻の穴に注ぎ込んであげなさい。あなたのたあつぷりのザーメンをねえ」

ミステイの口から告げられることで確信へと変わる射精の時。

排泄の為の穴に白濁液が流し込まれる。どこまでも穢し尽くそうというのか。

「お、おやめなさいッ……!! 射精だなんて、お尻の穴ですよ……んおおっ!! はひっいい!! ひやぐうう!! お、おちんちん、とめてえええッ!!」

変幻ヒロインの悲痛な叫び。それは怪物の肉棒と一緒に、自身の雌竿への責めも含まれている。

怪物が射精間近なように、ザラついた舌で舐められ、締めつけられるヒロイン巨根もまた限界を迎えようとしていた。

これでは尻穴を犯されて悦ぶ変態同然だと必死に耐えようとするも、怪物の荒々しいピストン運動によって掻き回される直腸と尻穴が、少しずつ熱を帯びてくるのすら感じてしまふ。

それは芽生えてはいけない。知ってはいけない被虐の恍惚であり、受け入れてしまえば本当におかしくなってしまうかねない。

ズリユウウ!! パンパンパンッ!! ジュリユルウッ!!

「んほおおお!! お、おちんちんだめえっ!! これ以上、してはあ……ひぐうああ!! おちんちんも、千切れてしまいますのおおッ!! ひいああ!! んうっぐ!! くひいう



うう!!」

ラストスパートをかける怪物の腰と舌。片や射精をする為に、片や射精をさせる為に限界まで力を込めてくる。

唾液を垂らしながら引き千切らんと肉棒を締めつけて引っ張られ、排泄穴から奥まで熱い肉の刺激が送り込まれる、痛みを伴う確かな快感。

もうひたすらに許しを請うように悲鳴の中で声を上げることしか、シャインミラージュにできることはなかった。

「ルオオオオオオオオオツ!!」

尻穴を犯す一体が高らかに吠えた。

それが何を意味するかなど、考えるまでもない。いや、考える暇すら存在しない。

ぶびゅううううううううう!! どびゅつびゅりゅりゅりゅ!! びゅぶぶぶ、どびゅぶううううう!!

「んひひひひひひひひひ!! あ、熱いひひひひひ!! せ、精液が、お尻に……お尻のなかに入ってきてええええええツ!!」

パンつと一際強く腰が叩きつけられたかと思えば、直後に放たれる火傷やけどしてしまいうなほどに熱く濃厚な怪物精液。

直腸が怪物の粘液で蹂躪されていく感覚に目を見開き、首を振って嫌がる変幻ヒロイン。だがそれを切っ掛けにしてシャインミラージュもまた限界を迎えてしまう。

「あ、あ、あああッ!! 嫌あああッ!! で、でるでるでるううう!! また、精液出てしまいますのおお!! んほおおっおおおおお!!」

びゅりゅりゅりゅううう!! びゅるるるるるうううううう!!

まるで尻穴射精を受けて押し出されたように、シャインミラージュもまた改造巨根から盛大に白濁液を噴出させた。

怪物の精液を尻穴に受けながら、自身は地面をビチャビチャと熱い粘液で穢していく。

「くほおおおっおお!! お、お尻にだされながら、だしてしまっていますのおお!! わ、わたくし、わたくしいい……ああっああ!! はへええええええッ!!」

屈辱の尻穴射精絶頂を受けながらも、頭の中は強大な解放感に満たされる。

人前で覚えているいけない感覚。正義のヒロインがしてはいけない行為。だというのに、身体は悦びを覚えてしまっていた。

「ハハハッ!! 怪物にチンポ汁ぶち込まれていきやがった」

「なあにが正義のヒロインだ。このまま雌犬ヒロインとして活動した方がいいんじゃないか?」

目を覚ましたシャインミラージュの注意が、一番に憎き敵であるグラッドに向くのは当然だった。

しかしそれも束の間。囚われた正義のヒロインが現状を理解するのに時間はかからない。「……あ……み、皆さんッ!! はやくここから離れて!! 逃げてくださいッ!!」

僅かな混乱の後に変幻ヒロインの口から出たのは人々の安全を望んでのモノ。

拘束され何もできない状況で街を破壊されるといふ、脳裏に浮かんだ最悪の光景。いかに遠くに逃げたところで意味はないのだろうか、それでもそう叫ばずにいられなかった。

今の言葉でシャインミラージュであるという確信を得た人達は、正義のヒロインの敗北という事実を改めて覚え込まされながらも、速度はバラバラながらに遠ざかっていく。

「流石は正義のヒロインシャインミラージュだ。人間共もしっかりと言うことを聞いてくれるなア」

逃げていく無力な存在達に対して何をするわけでもなく、ただ仮面の男は正義のヒロインの存在の大きさを褒めるだけ。

「……何が狙いだというんですの……!? もしかの方達に手を出したりすれば、わたくしが許しませんわよ」

逃げていく人々の後ろ姿を見てほんの僅かではあるが安堵の表情を見せる変幻ヒロイン

は、バイザーの下の青い瞳でグラッドを忌々しく睨む。

囚われ、神聖なエナジーの自由すらも奪われた今の自分に何ができるのか。

正義のヒロインとして戦うことは難しいかもしれないけれども、それでもその意志が消えたわけではない。

今日まで多くの苦痛や屈辱を味わわされてしまっていたとしても、最後まで逆転の可能性を諦めてはいなかった。

「アレだけ無様な姿を晒してやがった癖に、いつも口だけは一丁前だよな。ま、その強気な態度がいつ崩れるのか楽しみだけだよ」

グラッドに敗北し、多くの調教を受け、更にはダーククライム基地内での見世物ショー。いくつも存在するダーククライムに囚われてからの最低な記憶の数々。いくら敗北から逃れられない出来レースであったとはいえ、口にしてしまったのは自分自身なのだから、それを思い返すだけで心が押し潰されそうになる。

事実であることは変わらずに言い返すこともできずにギョツと唇を強く合わせ、ただ悔しさに満ちた表情で睨むだけの変幻ヒロイン。

（わたくしが何をされようとも、せめて他に被害が出ないようにはしませんと……!!）
いかな非道な調教を受けようとも、この街や罪もない一般人だけは守らなければ。

「んんっ……!! くう、んうう!!」

十字架磔によって、スレイヴフォームの状態で無防備な敗北姿を晒す変幻ヒロインは力を込めて脱出を試みるも、背後の十字架は僅かに揺れることさえしなかった。

「んむうッ……お、おひやめらひやい……!!」

グラッドの手によって両の頬を掴まれ強く圧迫され、強引に口を押し出されるような惨めな姿。

言葉も満足に発することができず、むしろ無様さが際立つ始末。

「まア安心してくれ。今日の狙いは人間共じゃなくお前だからなア」

「ら、らんれふっへ……」

仮面に隠れたグラッドの口から紡がれる、挑発としか思えない、段々と速度を落としての言葉。

この場で行われるのはシャインミラージュへの次なる調教なのだ、そう言っている。

「観客がこれ以上減る前に始めるとするか」

パチンと、グラッドによる今日二回目の指鳴らしによる合図。

「な、今度は何を企んでいるんですの……!!」

地震を思わせる揺れは間違いなくこの巨大な装置によるもの。

つまりはこれだけ大仰な仕掛けを用いて、人前での調教をするというのだ。

一体どんな仕掛けなのか。それを考える間もないまま、台座となっていた部分に変形を始める。

「お前以外は楽しいことつてどこかね。ほらよッ!!」

ズブズブウツ!!

「んひいいいいッ!? お、お尻いいッ!!」

十字架も同様にその姿を変え始め、一度シャインミラージュの拘束が解かれた。

しかし、グラッドの手によって逃げることは許されず、それどころか一度コスチュームの尻部分が引つ張られたかと思えば、極太のバイブが尻穴へと挿入されてしまう。

「んあああ……ぬ、抜きま、せんとお……んふう……きやつ!? んぐうつ……あああ……ど、どれだけ、変態のようなことをお……」

震える足場の上で内股になりながらも、尻穴を犯す凶悪な黒バイブを抜こうと手を伸ばすが、それは容易く阻まれた。

十字架の内部から紐状の物体が射出され瞬時にシャインミラージュの身体に纏わりつく。排泄穴からの肉悦に満足に力が入らない変幻ヒロインは抵抗らしい抵抗もできないまま、Gカップの爆乳を強調した状態で両脚を大きく開脚、更には後ろ手で拘束されるという『亀

甲縛り』で上から吊るされてしまった。

(んんっ……な、縄が喰い込んで……パイプの入ったお尻があ……わたくし、お尻で感じるだなんて、あつてはいけませんのに……)

全身に強めに喰い込む縄が卑猥な玩具を内部へと押し込み、特に大きな尻悦を変幻令嬢へと刻み込む。

こんな変態的な刺激で感じてはいけない。そう思っているのに、あの日怪物に犯され、調教を受けてからアナルは既にただの排泄器官ではなくなってしまった。

ただ押し込まれただけで腸壁が擦られて鋭い尻悦が生まれ、ビリビリと脳天に抜けてしまふ変態的な刺激。

再びの拘束に自身で引き抜くこともかなわず、縄によって常に押されている状態が継続する。

「変態ねエ……」

含みのある呟きは変幻ヒロインに聞こえはせず、グラッドは揺れる足場から地面へと降りた。

吊るされるシャインミラージュ以外誰もいなくなった台座。その足場がスライドして消え、内部が丸見えとなる。

「み、水……？」

シャインミラージュの目に映るのは、巨大な台座の中に溜め込まれていた液体。

博士の開発した特殊な液体でもない限りは、これはただの水なのだろう。つまりは、台座となっていた場所は巨大な水槽だったということ。

（わたくしを窒息させようというんですの……）

自由を奪われ吊るされた状態で、下には大量の水。

そうなれば今から行われることはある程度は予想がつく。水責めによる窒息が狙いなのだろう。

「大体察してるとは思うが、これからその水で楽しんでくれよなア。なアに、殺したりはしねエから安心はしてくれ。オレもまだ楽しんでエからよ」

変幻ヒロインの思考を読んでいるかのようなタイミングで、グラッドが自分勝手な言い分を含みながら笑う。

やはりというべきか、殺意がないのだけがせめてもの救いだらうか。

「さて、じゃア始めるとしようぜ」

「んひいいあああッ!! お、お尻い……!! お尻で、暴れてえええッ!!」

グラッドの言葉を合図にしてか、突如として尻穴を占領する黒バイブが激しい振動と前

後運動を開始した。

ただ震えるだけならばいざ知らず、生物のように内部で暴れられてしまえば、ただただ被虐の悦感を叩きつけられるだけ。

「くふうあああッ!! お、お尻……おやめなさいいいッ!! あ、んんうッ!! な、縄が、強くう……!!」

巨大な肉悦にビクビクと卑猥に縛られた身体を暴れさせる変幻ヒロインだが、それは余計に縄をキツく喰い込ませるだけ。

自ら受ける刺激を大きくしているだけでしかないのだが、バイブの刺激を受け続ける限りどうすることもできない。

「ケツ穴でそんなに喘ぐなンざア、変態なのはどつちかねエ」

嘲笑するようなグラッドの声が下から届く。

「はひいっいい!! こ、これは、あなた達、があ……んひいああ!! あ、あ、ああっひい!!」

怪物に犯され、ミステイにレイピアを突き刺され、その後も今日まで暇があればアナルに悪戯をされてきた。

その結果が排泄穴の望まぬ快感。他の誰でもない、ダーククライムの仕業に他ならない

というのに、まるで最初からの変態だったような言い分に変幻ヒロインは怒りを覚える。

「そんなの知らねエなア。今アへってンのはお前なんだから、ケツ穴で感じてる事実は変わらねエだろう？ 変態ヒロイン様よ」

「な、何を勝手なことをお……んひいいああッ!! んおおお、おおっひいい!!」

言葉も満足に言い切れないほどの強烈なバイブ振動に、変幻ヒロインは堪らずに下品な嬌声を響かせた。

振動が、ピストン運動が、排泄の為の器官から濃厚な変態刺激を送り込んでくる。

これが初めてであれば声も抑えることができたかもしれないが、何度も弄ばれてしまった今ではそれも不可能。変幻ヒロインは巨大な水槽の上で亀甲縛りで吊るされながら、無様な悲鳴を響かせ続けた。

「こ、これ、激しすぎますのおおッ……!! んんう、んおおお!! ひゃひいいああ!! んうつぐ、はんうああッ!!」

そう、まるであの時の怪物を思い出させる、短くも激しい前後運動に腸壁が乱暴に摩擦される。

恥部以外で肌に食い込む黒縄が痛みを生み出しているが、それも巨大な快感の前では吹き飛ばされてしまっていた。

(だ、誰かに、見られているかもしれない……で、でも声が、勝手に……)

ここがダーククライムの基地内ではなく天下の往来だということを理解はしているが、それでも閉じようと合わせた唇はすぐに上下に引き離される。

身体の奥底から押し上げられる被虐の恍惚が、凜とした正義のヒロインとは思えない下品な嬌声を押し出していった。

こんな姿を誰かに見られてしまってもしたら……そう思っても耐えることができないほどに、尻穴を蹂躪する玩具は力強く動いている。

一分一秒でも早く変幻装姫の身体に限界を与えんと、ダーククライムの用意したアナルパイプは暴れ続け、一切弱まる気配を見せない。

「んんんうっ!! だ、ダメ、ですのお……これ、こんな、強くされてはああ……くほおおお!! んうひい、あ、ああつはあ!!」

(か、身体が、限界に……このままでは、頭、真っ白に……)

このまま続いている、もうすぐにも快楽のボルテージを振り切ってしまう。

ギチギチと、重力に従って爆乳をたふんと釣鐘状に垂らす卑猥な姿で縛られながら、誰かに見られてしまっている状態で尻穴で絶頂を迎えるなんてしたくない。

そうは思っても、アナルから全身を駆ける淫らな熱はどんどん肥大化して脳内まで

もを汚染してくる。

「なんだ……シャインミラージュが変な声を出してるぞ……」

「どういうことだ？ 一体何が……」

「……えっ……ど、どうして……あぁっひい!? に、逃げて、来ないでええ……!! んお
おおお!!」

逃げていたはずの人々。しかし全員が全員遠くまで逃げていたわけではない。

物陰に隠れて様子を窺っている者もあり、ダーククライムの破壊行為が始まらず、今日まで耳にしたこともなかったシャインミラージュの嬌声が聞こえて少しづつ姿を見せだしたのだ。

「少したが観客も来たみてエだな。今日は何もしないでいてやるから、見てエなら見ていいぜエ。シャインミラージュの無様な姿をなァ」

異世界からの悪の言葉など信じていいはずはないのだが、希望の象徴たる正義のヒロインは敗北して囚われてしまっている。

どうせ逃げ場などないのだからと、近くにいる者達。特に男は、ゆっくりとであるが巨大な水槽の上で喘ぐ敗北ヒロインという餌に集まってきた。

「シャインミラージュの胸でけえ」

「あんな縛り方されて……ケツで何か動いてるのか？」

自身の危険よりも今の状況の確認をと、よく見ようと近づく男達。

元より豊富なボディを持つ正義のヒロインに関心を持つ者達にとつて、今の変幻ヒロインの姿はあまりにも目に毒であり、興味をそそるモノだった。

「お、お願いですから逃げて……んうつうう!! おおっほ!! み、見ないでえええええッ!!」

多くの視線を浴びながらも必死に叫ぶのは、本当に逃げて欲しいからというのもあるが、今の痴態を見せたくはないからというのもある。

しかし、熱を帯びた男達の多くの視線が突き刺さる度に、身体の熱が更に上がっているようだ。

(も、もう、限界ですのお……あ、頭、真っ白になってえ……!!)

けれどももう無理だった。耐えようとする身体が悲鳴を上げ、特に尻穴が肛虐の悦感に浸って浮き上がることができない。

「み、見ては、ダメええええええッ!! んひいあああああッ!!」

最後の懇願で叫んだのを切っ掛けにして、シャインミラージュの身体は快楽に吞まれた。顎を跳ね上げ、ビクビクと全身を痙攣させての被虐の絶頂。排泄穴を犯されての変態的

な恍惚に満たされる変幻ヒロインは、人々に見られている中で脳内を白く染め上げてしま
う。

「ヒヒヤヒヒツ!!」

変幻装姫の絶頂を確認したグラッドが笑った。

ぶびゅうううううう!! ぶびゆるるるるうううッ!!

「んほおおおお!! あ、熱いのが、熱いのがお尻の中にいい!! は、入って……お
おっほおひいい!!」

キュウつと、絶頂の反動で巨大パイプを強く締めつける変態尻穴へと、火傷しそうなほ
どの熱を持った、濃密な白濁粘液が放たれた。

一瞬で直腸内を満たす擬似精液に敏感な腸壁が反応を示す。嫌悪よりも快感が優先され、
変幻ヒロインは更なる汚辱液を欲するかのようにより強く締めつけた。

「おいおい、シャインミラージュが変な声上げてんぞ」

「アレ……イっちゃまってんじゃねえのか？」

正義のヒロインどころか、普通の少女ですら発しない雌の声に、男達が戸惑いを見せる。
だが間違いないだろう。亀甲縛りで吊るされる上空の変幻ヒロインは、囚われた状態で
絶頂をしているのだ。

「はへえあああ……んぶうつうう!!」

白濁液を排泄穴に浴びての肉悦を覚えている最中に、急に支えがなくなり身体が空を切るのを感じる。

バシャアンつと盛大な音を立て、周囲に水飛沫しぶきを散らしながら変幻ヒロインは水槽の中に叩きつけられた。

「ごぼおおつ!! んぶおおお、んぶつ!! ぐぶぶつうう!!」

(い、息が……ま、まだ、バイブが動いてえ……!!)

逃げ場のない水中。息をとめて少しでも長く苦痛の時間を耐えようとするが、擬似バイブからの白濁液は注がれたまま腸壁を熱く穢し続けていた。

それどころか淫玩具はとまる様子も見せずに尻悦は大きくなる一方で、閉じようとする口がこじ開けられる。

シャインミラージュの口からは多量の泡が生まれ水面へと上がり、表情は酸素を失っていく苦しみを訴え始めていた。

「か、壁が透明に……!!」

変幻装姫が肛悦に喘ぎ水中で不自由な身体でもがく中、台座であった巨大水槽の壁面が透過し始める。



周囲の人々からも、水槽内のシャインミラージュが苦しむ様が見えるようになっていた。「んぶうつぐう!! ごぼぼっ!! んぼおおおおッ!!」

(く、苦しい……い、息をとめることが、全然できないだなんて……)

拘束された身体では満足に暴れることもできず、ただ排泄穴の中で暴れる黒バイブの快感に翻弄されるだけのシャインミラージュ。

口からは絶えず残しておかねばならない酸素が泡となって水面へと消え、ガクガクと全身が快感とは違う痙攣を見せ始める。

本来ならばもつと長い時間耐えられるはずなのに、アナルバイブの肉悦のせいでそれもかなわない。

「んぐぼお!! がぼっ!!」

(も、もう……なにもお……)

段々と薄れていく意識が限界を訴え、最後に大きく口を開いて多量の泡を生み出したかと思えば、グルンと白目を――

「……んぶうあぁッ!! げぼっごぼおッ!! かはっ……げぼっげはっ……!! はぁはぁ……

……あ……はぁあ……」

完全に目の前がブラックアウトする寸前、一気に変幻ヒロインの身体が引き上げられて

元の位置にまで吊るし上げられた。

反射的に咳き込み、新鮮な酸素を欲して大きく口を開いて胸を上下させる。

「言い忘れてたが、お前がイクとケツに入ったバイブからいいモンが出て、更には水に飛び込むって仕掛けってわけだ」

「はあはあ……い、言うのが、遅すぎますわよ……んんうっう!! ま、また、バイブがあ……ごほお、おおッ!! くひいああっ!!」

明らかにわざとであろうグラッドの後出し情報に怒りを覚える間もなく、意識を失う寸前に沈黙していたバイブが再び活性化を始めた。

絶頂によって更に感度を増した排泄穴が変幻ヒロインに被虐の悦びを刻み、ギチギチと強く縛られながらも尻肉が震える。

「シャインミラーージュが尻でイっちまったのか……?」

「濡れたシャインミラーージュ……イイなあ」

水分を含み肌に張りつく黄金色の髪とコスチュームが、変幻ヒロインの姿をより扇情的なモノへと変えていく。

アナルでイットたという事実もあるが、僅かに弱った表情を見せながら汗水を滴らせるその姿に、人々は変幻ヒロインへの欲望を表面化させ始めた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【電子版】
季刊配信
3-6-9-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



2次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

UN **コミック
アンソリアル**

**敗北乙女
エクスタシー**



あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

新刊 姫騎士

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!



小説家になるこの男性向けサイト「アクトアインノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル



二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫